

感想文「日の出太陽の家、体験合宿での気づき」

K. Hara

匠塾の企画で日の出太陽の家を訪問し、障害者の方と触れ合う機会を得た。4人の障害者の方との粘土工作学級に混ざり何十年ぶりかに触った粘土の手触りと、全員が懸命に作品に取り組んでいる姿に感激した。

夜の懇親会では皆さんとのYMCAの歌とダンスを通じ、満面の笑顔に出会い、私も心から嬉しくなった。また翌朝の食事を一緒に頂き、一品ずつ大事に食べている方を見て何故か感動した。

なぜこのような感動に繋がったのだろうか。

よく考えてみると「彼らのひた向きに生きる姿勢」を感じ取れたことがその感動に繋がっていた。自分は彼らのように懸命であったか、その時々感謝したか、他人に優しくあったか、自分の不運を嘆き、失敗を他人のせいにし、努力を怠ることはなかったか。

今からでも遅くはない。

この体験は自分を見つめ直し、残された時間を地域や利他のために使い、懸命に生きていこうと思わせる機会となった。

「日の出太陽の家 体験ボランティア合宿に参加して」

K. Hashimoto

日の出太陽の家にて障害者の方々との交流・共同作業に参加してまず一番心に残った事はスタッフの方々の障害者に対して、とても真摯で誠実な姿勢だった。

ともすれば日常のなかで見てみないふりをしてしまいがちな、また 特殊な人達としてできるだけ関わりを持ちたくないといった感情で接してしまう障害者の方々、特に知的障害を持っている方々に対しあれほど真剣に向き合っている人達がいる。

その事をまのあたりにして自分自身の中から何かとても居心地の悪い感情が浮かんでくるのを感じた。それは、決して障害を持つ方々に対する嫌悪感ではなく、今まで何もしていない自分のスタッフの方に対しての劣等感に近い感情から来る居心地の悪さだったと思う。

久保田さんの話によると何らかの障害を持っている人は全人口の4%近くいるそうだ。 先天的な障害・後天的な障害・身体障害・知的障害などのすべての障害を含んだ数字なのだが決して少なくない数字だと感じた。単純に25名に一人は障害を持っていることになる。程度の差こそあれ誰でも身内に一人くらいは障害者がいるといった数字ではないか……。！ これは決して非日常の特殊な世界の数字ではない。

ましてや、さまざまな環境問題、最近の放射能汚染の問題、食品汚染の問題、加えて異常気象、などなど私たちを取り巻く環境は決して良くなっているとは言えない。

久保田さんの話の中で、人間の食用パン材料と同じ小麦を猿の餌に使ったところ異常が現れたとのこと、1980年代のモンキーセンターでの話だそうだ。

こういった現実決して見て見ない振りをせず日常の問題として向き合わなければならない。 私たちはもっと障害者を身近に感じるべきであり、自らの事として障害者に向かい合う姿勢を持つべきである。

理屈ではない日常の、現実の話なのだ。障害者の居る世界を非日常とせず、日常の世界として認め。共に生活ができる環境を作っていかなければならない。

また、環境問題にももっと敏感にならなければならない。

具体的に何をすべきか……。できることはなにがあるのだろうか……。

たった1泊 数時間の障害者とのふれあいではあったが私にとってはとても意味のある刺激的な研修となった。

「日の出太陽の家・体験ボランティア合宿に参加して」

M. Oyama

9月16日～17日、1泊2日の知的障害者施設での体験ボランティアは私にとって生まれて初めての経験でした。この合宿を通して気づいたこと、学んだことが3つあります。

1. 責任者の久保田さんから「なぜ障害者が生まれるのか。誰でも障害者になる可能性がある」というお話から、障害者に対する正しい認識をすることの重要性を学びました。今の世の中はあらゆる情報が氾濫していますが、障害者の現状についてもっと世の中が知る必要がある情報が正しく伝えられていないのではと思いました。
2. 障害者の方も一人ひとり人間として精一杯生きている、という当たり前のことに気がつかされました。初日の午後、私は「ひまわりグループ」という重い障害のある方々の屋上でのお散歩のサポートをさせていただきました。8名（だったと思います）の障害者の方に3名のスタッフがつき、一人ひとりに万歩計をつけてあげて、一人ひとりの状況にあわせて屋上を丸く歩くよう手を取り、声をかけながら根気強く一緒に歩くのです。私も一緒に歩きながら、なぜか心がとても穏やかで優しくなりました。
3. 施設のスタッフの皆さんの労働環境の厳しさや、献身的な働きに対して十分な（適切な）報酬を与えることが現況では難しいということも今回改めて認識しました。使命感だけでは続けられないし、一部の人だけに任せるようなことでいいのだろうか、とも思いました。また、このような施設が地域社会で受け入れられることが難しいという現実をどうしたら変えていけるのだろうか、と考えさせられました。

自分がこれから何ができるか、まだわかりませんが、まずは今回経験したこと感動したことを忘れないことだと思っています。ここで働き初めて3年目というスタッフの人が「毎日みんなから感動をもらっています」と楽しそうに話してくれたことを忘れることができません。

以上

「日の出太陽の家 体験ボランティア合宿に参加して」

F. Sakakibara

今回、多くの知的障害者の方、またサポーターの方と直接接する機会を得、施設の活動について、多少理解できた。

- ・ 入居者の方が皆さん元気で、活動的なのに驚いた。
一人ひとり個性にあわせ、日々の行動計画をたて実践する事、また、入居者の方と職員の方が元気にふれあっている事が重要で、少人数でのサポートであり、職員の方の大変な努力によるものだと思う。一方、職員の方もいろいろな面でストレスを持っていると思われ、心のケアも重要と思った。
- ・ 施設の運営の大変さが伝わってきた。
何もしないでも運営する事は可能だが、入居者の方が元気で、幸せに暮らすには、日々動いていることが必要で、色々仕掛けていくには、人・物・金が必要となる。「武家屋敷」をこのようなことに活用したいとの切実さが伝わってきた。

私の住んでいる近くに、区が運営する障害者の方の通所施設がありますが、普段どのような活動・生活をされているかよく判っていなかった。この経験以降より関心をもってみるようになった。

都心の施設は回りに自然が少なく、ほとんど外に出ていない。太陽の家の環境の素晴らしさ、大切さがわかった。

もっと多くの方が経験し、関心を持てるようなシステム作りが必要と思う。

「日の出太陽の家 体験ボランティア合宿に参加して」

M. Takayama

小生は同じ東京都内在住ですが、都内のこんなに広い木や畑に囲まれた場所で、昔小学校の頃に九州で初めて体験した米収穫と似た仕事を約50年ぶりに体験し、非常に楽しかった。

勿論、匠塾メンバー以外の「日の出太陽の家」の障害者メンバーとも一緒に約半日の作業を初めてやったのだが、落ち着いて出来たと思う。

みんなで顔を合わせて喋りながら少しずつ作業をする姿や、暑かった後に皆で競争して水を飲みあう姿を見て、障害者の方々がそれぞれ反応も違うが、一人でいるより大人数でいる方が絶対によいのだと思った。

黙っているよりも、たまに喧嘩してもよいから声を掛け合うことの良さを実感した。

朝食を障害者の方々と一緒に食べた折も、それぞれの方が周辺のメンバーと顔を合わせながら少々ですが喋りながら食べる姿を見て、多くの障害者が集まって暮らすのは、管理者としては大変でしょうが、素晴らしいと思った。

私も従来は大手企業での業務だけで生活してきただけでしたが、世の中にはいろんな方が生活していることに気づき、いろんな興味を持って協力していきたい、と感じてきた次第です。

日の出太陽の家 ボランティア合宿に参加して 感想文

R. Kuwana

「ジェノタイプは一緒だがフェノタイプは違う。」

私が十年前に参加したバイオ・サイエンスの科学者たちが、身近でこんな会話を交わしていたことを思い出しました。

久保田さんの経験と知見によると、知的障害者は「環境汚染の被害者である」。この現場に長く向き合ってきた誠実な人が初対面の我々にも述べざるを得なかったメッセージにしっかり向き合うことが、最初に私たちが行わなければならないことではないか。

そうでなければ、現代にあっても耳を疑う座敷牢を困うしか出来ることがなくなってしまふ。「沈黙の春」や「ストロングメディスン」を少し読むだけで、久保田さんのメッセージの正鵠を得ている可能性は高いという予想がします。

現代までの科学が精神障害者の原因特定と治癒に現在どこまで研究を進めてきたか我々はあまりにも知らない。受精卵が分裂を始めると最初にできるのは神経組織であることは小学校で習っていたのです。けれど最初に出来上がってくるその組織がどれだけ環境からの攻撃にナイーブであるかは想像しなかった。これが私たちの勉強でした。

科学と医療と社会科学の今の到達点を知り、スタートラインを引くことを最初の作業として実施しなくてははいけないと思いました。これは倫理的な反論を受ける可能性が高いことだと思えます。けれどもここからしか出発できないという気がします。

先に失礼するときに頂戴した餞別の栗は湯搔いて、特大のオクラは天麩羅で美味しくいただきました。栗は芽を出し栗の木に育ちまた実をつける。オクラは遠くアラブの地から日の出町にやって来てそこで子孫を残している。

数え切れない遺伝子のコピーが行われ、人間なら60兆個の細胞が新陳代謝を繰り返している。そこで行われている遺伝子のコピー作業の僅かな部分でエラーが起こり、これを修復する作業がこれまたエラーを起こすことでエラーが放置されて現れるフェノタイプの振る舞いの触れ幅の大きさを我々はきちんと頭脳と精神で納得していかなければいけないと思いました。

民主主義や防衛や医療で外国や沖縄が負担している重量に日常関心がない私たちがせめてこの分野ではご恩返しをしないともう世界で生きていけない、わだつみの声に申し訳ないというそのような気持ちがしました。